インフォメーション

川崎いのちの電話主催

市民公開講座

講師／アルフォンス・デーケン氏（上智大学名誉教授）
「生きがいとユーモア」

【日時】 2013年7月20日(土)　開場 13:30 / 開演 14:00
【会場】 エポックなかはら　大ホール2F
JR南武線「武蔵中原駅」　改札口右へ徒歩1分
【料金】 無料

問合せ　川崎いのちの電話事務局(月～金　10:00～17:00)
TEL:044-722-7121

アルフォンス・デーケン(Alfons Deeken)

1932年ドイツ生まれ。1959年来日。1973年フォーダム大学大学院(ニューヨーク)で哲学博士の学位(Ph.D.)を取得。以後30年にわたり、上智大学で「死の哲学」などの講義を担当。カトリック司祭。
現在、上智大学名誉教授。「東京・生と死を考える会」、「生と死を考える会全国協議会」名誉会長。1991年全米死生学財団賞、第39回菊池寛賞、1998年ドイツ功労十字勲章、1999年第15回東京都文化賞などを受賞。
主要著作:『よく生き　よく笑い　よき死と出会う』新潮社、『新版死とどう向き合うか』NHK出版、『あなたの人生を愛するノート』フイルムアート社、『心を癒す言葉の花束』集英社新書、他多数。

資金ボランティアとしてのご支援を！

川崎いのちの電話の活動は皆様の資金援助によって運営されています。
多くの方々にご協力をいただきますようお願いいたします。

【1】賛助会員年会費　下記からお選びください。

法人	10万円	5万円	3万円	1万円	
個人	5万円	3万円	1万円	5千円	3千円

【2】一般寄付　(金額、回数は自由です。)

【振込先】 ■郵便振替　00240-2-36798
社会福祉法人川崎いのちの電話
【問合せ】 川崎いのちの電話事務局　TEL：044-722-7121

＊賛助会員・一般寄付金ともに、個人の所得税・住民税・相続税(要確定申告)および法人の法人税において、優遇措置の対象となります。

受信状況　2013年1月～4月　受信件数　**4,735 件**（1日平均　38.8件）　自殺志向　**404 件**

寄付感謝報告

2013年1月～2013年4月　川崎いのちの電話のために、温かい資金援助をいただきました。心から感謝し、ご報告いたします。この事業の発展にこれからもご協力くださいますようお願い申しあげます。

[個人]

(1月)	山田美和子	原　勝代	藤島とみ子	坂田美智子	府川　宏	酒井靖恵	仁上喜久夫
小林美年子	藤井たかね	中里君江	岩田洋子	小山稀世	片山世紀雄	小野岩雄	久保美矢子
藤　照邦	浜崎すみ子	吉崎隆男	前田絢子	宮下貞子	山田美和子	上嶋良子	清宮慶一
岩田良子	髙橋　勉	澁谷初美	石原淳子	功刀峰子	匿名5名	石川俊恵	柴田武子
土屋道子	岡本由利子	田中房治	伊藤奎助	鈴木敏江	(4月)	山田美和子	戸張道也
豊後秀長	鈴木　清	森　清	豊後秀長	近藤八千代	佐藤正明	細見慶子	鏑木昌代
岡本　弘	近藤俊朗	宮原信子	糸山恵美子	村上カズコ	鈴木　清	久保田節子	佐藤節男
今野タネ子	匿名3名	千田智子	粟井　清	青野　勇	髙橋　勉	早崎悦子	梶　睦子
久保宗義	(2月)	匿名2名	常松恭子	近藤和子	漆原敦子	金子圭賢	匿名1名
井田光政	豊後秀長	(3月)	露木知美	久保美矢子	豊後秀長	安藤義雄	

[法人及び各種団体等]　東洋ロザイ(株)　日本基督教団新丸子教会　日本基督教団川崎境町教会　横浜指路教会　横浜いのちの電話　埼玉いのちの電話　千葉いのちの電話　(東京)いのちの電話　ジェクト(株)　(株)多摩設計　大本山川崎大師平間寺　川崎市精神保健福祉センター　おくせ医院　日本基督教団川崎教会CS　日本基督教団三田教会　日本基督教団元住吉教会教会学校　川崎北ライオンズクラブ　捜真女学校高等学部中学部　ケベック・カリタス修道女会　カリタス学園同窓会　川崎中原ロータリークラブ　(株)飛鳥典禮　ビーズ工房松浦　共同購入　募金箱

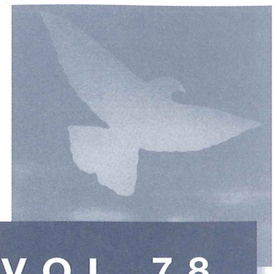
[10万円以上の個人・法人及び各種団体等]　ライオンズクラブ国際協会330-B地区(11万)　川崎白百合ライオンズクラブ(10万)　近藤八千代(200万)　川崎いのちの電話センター製作部(50万)　匿名1名(10万)

合計 4,192,769 円

編集後記

今回は、予定していた内容を変えて、亡くなるまで理事長を務めた近藤俊朗さんを偲ぶ特集としました。設立からこれまでの資料や写真を見ると、当然のことですが、近藤さんの名前や顔がたくさん出てきます。ここまでの苦労が伝わってきました。ボランティア歴4年と短いだけに、近藤さんの〝原点〟を知り、特集号の製作に携われたことはとても幸いでした。4月から広報部に加わりました。(あ)

近藤理事長の追悼号が出来上がる。追悼文を読みながら、ある雨の日、ご一緒した会合の後タクシーに乗せていただいたことを思い出した。電話の将来、女性論、家族のこと、老人問題、性について、理事長と実に様々な話をさせていただいた。「主婦は家を空けるのが大変だよなあ、家族には頭が下がる」と気遣いを頂いたことを覚えている。そして仲良くやっていこうよが口癖であった。最後にお会いした28期公開講座の日にもその言葉があった。(MM)



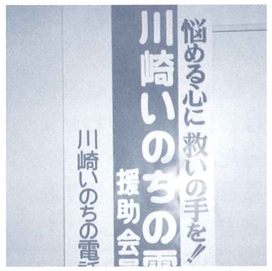
VOL.78
2013
SUMMER

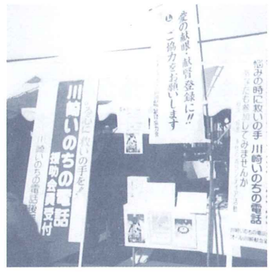
川崎いのちの電話

題字　近藤俊朗理事長

Kawasaki inochi no denwa

ひとりで悩まずに☎ **044-733-4343**





CONTENTS

特集
「川崎いのちの電話」
初代理事長　近藤俊朗を偲んで
日本いのちの電話連盟　樋口和彦理事長
川崎いのちの電話理事長　金子圭賢
田中幸治、豊田君子、菅沼和香子、岡田良子

インフォメーション
市民公開講座　「生きがいとユーモア」　アルフォンス・デーケン氏　(上智大学名誉教授)

自殺予防 いのちの電話
☎ 0120-738-556
毎月10日・24時間無料です
(午前8時～翌朝8時)

社会福祉法人　川崎いのちの電話

事務局：〒211-8690 川崎市中原郵便局私書箱17号　電話：044-722-7121　発行人：金子圭賢　編集：川崎いのちの電話広報部　URL：http://kawasaki-inochinodenwa.org/

特集

近藤理事長を偲んで

「川崎いのちの電話」の設立に尽力した近藤俊朗氏が、2013年2月16日に急逝しました。86歳で亡くなるまでの約28年間理事長を務め、資金集め、相談員の募集・養成、独自のセンター確保、社会福祉法人の認可など、先頭に立って多くのことに取り組んできました。長く関わりのあった6人の方に書いていただいた近藤理事長の思い出からは、揺るぎのない信念や行動力、人への優しさが伝わってきます。この歴史と理念を引き継ぎ、「川崎いのちの電話」はこれからも悩める人の声を聴き続けたいと思います。

近藤俊朗(こんどう・としろう)理事長の経歴

1926年(大正15年)6月17日、川崎市に生まれる。1950年、横浜市立医学専門学校(現在の横浜市立大学医学部)を卒業。1957年、近藤産婦人科を川崎市内に開業。1985年11月、「川崎いのちの電話」を設立し、理事長に就任。亡くなる2013年2月まで理事長を務める。2001年から日本いのちの電話連盟の理事。1994年11月、川崎市の社会功労賞を受賞。全国性教育研究団体連絡協議会理事、川崎市産婦人科医会会長、人権擁護委員なども務めた。

日本いのちの電話連盟　樋口和彦 理事長(京都いのちの電話理事長)

刎頸の友　近藤俊朗君の死を悼む

まさか君の死に遭遇し、私がこのような追悼文を綴ることになろうとは、この巡り合わせに人の知恵の知る由もなかった。

それどころか医者である君は、病床に伏す私を思い、遥か京都まで私を訪ねようとしてくれていたのだ。多忙な君の申し出を「ちょっと待ってくれ！私は大丈夫だから」とお断りしたのはつい最近のことだった。

考えてみると、70年以上に及ぶ君と僕ほどの長い付き合いは稀であろう。私たちは昭和14年4月に、同じ旧制神奈川県立川崎中学校に入学した。卒業後、君は医学の道に、私は心理学の道へと進んだが、ふとしたところから共に「いのちの電話」にかかわるようになって出会い、実は同級生であることを知った。以来「いのちの電話」関連に留まらず、人生全般、何かとお互いに相談し合うようになり、次第に親しさが増していった。

君はとにかく面倒見がよく、学会のこと、子供のこと、特に産婦人科の医者として、性教育の現場における一家言を持って世界中を飛び回り、年月を費やし懸命に尽してくれた。「性教育」という言葉からくるイメージの誤解が、最も大切な「人間性の意味を伝えること」の妨げとなるのでと、自らも含め、この問題にかかわる人々の悩みの深さをよく私にも訴えていた。

君が川崎いのちの電話の理事長となって、また、連盟の理事となって携わることになってから、私は懐かしい母校がある川崎へ、君に会うことを兼ねてたびたび訪ね、「川崎いのちの電話」の発展する様子をみせていただいた。

君が基礎を作った「川崎いのちの電話」は、君の努力のおかげで益々元気になっている。君は我武者羅と思えるほどの情熱をもって、理想に燃え、突き進み周囲を巻き込みながら突き進んでいった。こと「いのちの電話」事業推進への情熱は、誰にも適わないものがあったのを私は知っている。

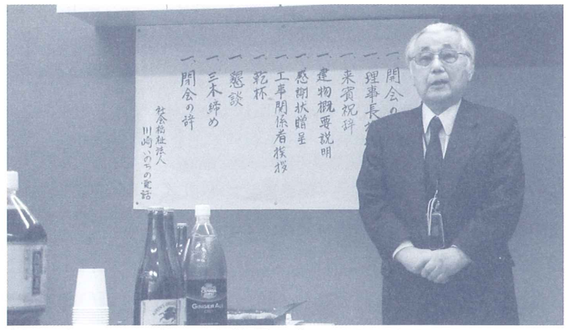
しかし、その君は、今はもう亡い。

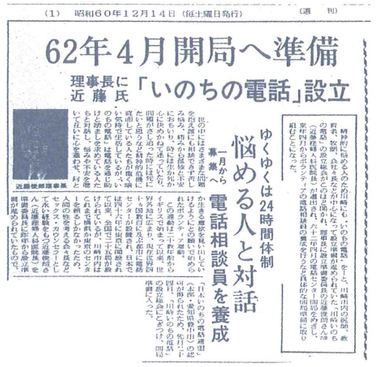
私は、この彼が並々ならぬ情熱で作りあげた「川崎いのちの電話」が未来永劫、受け継がれていくと信じています。

どうか、「川崎いのちの電話」のみなさん、仲よく(これは大切！)、人に生き甲斐を与えるほど精力的な彼の努力・活躍を偲びつつ、これからも大きく前進してください。

近藤俊朗君、長い、長い間の交わりありがとう。奥様はじめご家族の皆様に天よりの温かい慰めが豊かにありますように。2013年4月記す。

樋口和彦 氏


新しくなったセンターのお披露目会で(2013年1月)


(1)　昭和60年12月14日(任土曜日発行)　(週刊)

62年4月開局へ準備

理事長に近藤氏「いのちの電話」設立

ゆくゆくは24時間体制

悩める人と対話

電話相談員を養成

一月から事業へ

←設立準備を伝える地元の新聞(1985年12月)

最後になった26期相談員の認定式で(2012年9月)

講演後、佐藤初女さんを囲んで。(2011年11月)

川崎いのちの電話開局記念の披露(1986年9月)

バザーでの収益が活動を支えている

ライフワークだった川崎いのちの電話
理事長　金子圭賢

川崎いのちの電話の生みの親にして、偉大な創立者、初代理事長の近藤俊朗先生が急逝したとの報を受けたときにはびっくり仰天した。亡くなる3日前に会食をして、いのちの電話の健全な発展など今後のことについて話し合ったばかりだったのに。

先生との出会いは、当時勤務していた会計事務所長の命を受けて近藤病院の業務担当になったことに始まる。当時、高度経済成長社会へ邁進の最中で、世の中全体の空気が今と異なり、何か人々の顔がみな希望に満ち満ちて輝いていた。その中でも先生の顔はひときわ燃えているように映った。時に先生が41歳、私が25歳であった。それから、ライオンズクラブ、いのちの電話でも関係ができ、1年365日の3分の1は先生と一緒にいるほど深い付き合いになった。

新しい生命の誕生に立ち会うために産婦人科医を志向して勉学に励み、1日24時間地域医療に精進し、されど人の命を預かる医業の慢心を自ら諌めるべく、世界最大の人道的社会奉仕団体と尊称されるライオンズクラブ活動に取り組み、330B地区（神奈川県、山梨県、伊豆大島を奉仕地区とする）の第20代ガバナーとして活躍した。その後、交通事故死者の減少と反比例するように、現代社会の病巣とも言うべき人間関係の希薄化あるいは高齢化社会の進展など様々な原因の中で、精神的に孤立して自ら死を選ぶ者が増加する時代を迎えて、時の伊藤三郎川崎市長から、川崎市にも自殺予防を目的としたいのちの電話の設立要請の命を受けた。医師業務の宿命と言うべきか、いのちの電話事業こそ我が人生のライフワークを標榜して以来30年間、川崎市及び市民生活の向上と発展に資するべく、ひたすら全身全霊努力してきた。その姿に感動感銘した誰もが追随支援して今日の川崎いのちの電話があると言っても過言ではないと思う。

時に、近藤いのちの電話と揶揄されたり、あらぬ誹謗中傷を受けたりもしたが、この崇高な理念、信念、情熱は亡くなるその時まで、少しも揺ぎ衰えることなく、人生はピンピンコロリと逝くまで頑張るがいいんだよと、患者にも我々にも言っていたように、正真正銘、地域医療と社会奉仕に身を捧げて燃え尽きたのでしょう。今少しでもご指導を得たい気持ちは変わりませんが、今はごゆっくりお休みくださいと念じております。合掌

熱血漢が「川崎」を独立機関に
研修担当者会代表　田中幸治（理事・1期）

うすら寒い講堂の床板の上に12、3人の人々が円陣をつくって座っていた。ほとんどが中年の女性だった。かなり長い沈黙の後、重い空気を押しのけるように1人の女性が遠慮がちに、ファシリテーターの私を目の隅で意識しながら声を出した。「あの一、自己紹介をしませんか・・・」。近藤産婦人科の病棟内にある講堂で始まった第1期の電話相談員養成研修（人間関係基礎訓練）の光景である。

1年間の実習研修と講義研修の後、先の段階に進めるかどうかの審査会議が行われた。坂本堯聖マリアンナ医科大教授と共に現れた近藤理事長は「市民運動で始まった川崎いのちの電話なので研修生の意欲を受け止めて欲しい」と訴えられた。「主旨は分かりますが、相談電話は相談者を大切にしたい。相談の掛け手の気持ちをそのまま受け止められるかどうかを大切にして研修を進めていきたい」という研修担当者側との間で論戦がおこった。その中の人生経験不足の若者だった私は、坂本教授と近藤理事長に生意気な態度で食ってかかった。

「理事長を説得するのに大変だったよ。いのちの電話はみなボランティアです。大切にするものを共有して心意気で連帯しています。経営者と従業員の関係とは違います。多少生意気でも我慢してください」。何年か後で、研修委員長の白井節夫さんから聞かされた。生意気な若者が未だに川崎いのちの電話に在籍できて、活動できている事情である。

近藤理事長は熱血漢である。この熱血漢が川崎いのちの電話を独立機関にさせたのである。横浜いのちの電話は川崎より5年前に設立して、設立の準備をしていく川崎の指導助言センターであった。近藤理事長は「川崎市民の願いを結集したいのちの電話を独自に設立したい」という思いであった。横浜に川崎の思いを伝えに行くと、横浜の理事から雷が落ちたように怒鳴られた。「県内に独立した2つのいのちの電話は設置できない。横浜の支部機関でいいではないか」。当時、全国を見ても県内に2つのいのちの電話はなく、横浜は当然に川崎を支部扱いに考えていた。それが独立機関を申し出たので驚いたのである。

そこでひるまないのが近藤理事長である。下げたくもない頭を下げ、見たくもない顔を見て何度も説明した。神奈川県にも「政令指定都市であるから」ということで「県扱い」にしてもらい、川崎いのちの電話は独立機関として認められた。

近藤理事長の相談員に対する思いは「相談員は大変な電話をいつも受けている。電話に専念して下さい。お金のことは私が考えるから心配しないでいいです」「たかが相談員、されど相談員」「ボランティアは呆け防止になる」「私は死ぬまでいのちの電話はやる」という言葉に凝縮されている。

旧奉仕部、製作部の活動に理解
豊田君子（理事・2期）

今年2月2日に開かれた「チャリティー寄席」の会場で、製作部が作り、販売しているバザーの様子を私の傍らでしばし佇んでご覧になっていた近藤理事長が私に、「良くこの様にやれるまで、成れたね」とやさしく声をかけられました。「はい」と私は思わず答えたのですが、その言葉から川崎いのちの電話設立当時の大変だったいろいろなことを、理事長は思い出しておられたのかもしれません。まさかこの2週間後にお亡くなりになるとは、誰が想像出来たでしょう。残念としか言いようのない思いで悲しさがこみ上げてきます。

「お金のことは心配しないで。私が何とか集めるから」といつも話しておられた。ボランティア活動といえども組織として、部屋を借りて維持していくためには諸々の経費が必要で、理事長はじめライオンズクラブの方々には大変お世話になりました。心から感謝しております。

法人認可のための基金（1億円）満額積み立てを目指し、奉仕部も協力して5年で達成しました。川崎市からの公的援助資金獲得のため、市長のもとにたびたび足を運ばれたと聞いています。そして、川崎いのちの電話が川崎市民のためにという理事長の医者としての立場からの願いと強い心を折りに触れて感じてきました。

私は設立当初の資金不足の中で、何とか資金面のお役に立てればと、理事長夫人の八千代さんやそのお友達の方達と共に、チャリティーコンサートなどを企画したり、バザーのための作品製作を考えたりと、そのメンバーとして関り始めました。1986年1月に発足した奉仕部が企画部と製作部に分かれ、企画部はコンサートを東京銀座のポーラホールで、映画会を川崎市小杉の旧婦人会館で開き、そのつど会場に製作品のバザーを開きました。旧奉仕部は「お仕事会」として始まり、製作部として継続され、現在に至っています。

いつの時もどんな場所にも、近藤理事長は可能な限り足を運ばれ、あの柔らかい表情で私達を理解し応援して下さっていました。理事長の上下を感じさせない親しさと、あふれる熱意を感じながら、製作部員、相談員、研修担当、理事として共に歩んだ27年間でした。

相談員のことを第一に考えた
菅沼和香子（1期）

「川崎いのちの電話の相談員にはあまりお金のことで苦労をかけたくない、僕たちが頑張りますから」という近藤理長の言葉どおり、私の伺い知れない御苦労を設立以前から営々と重ねてこられ、そのお陰で私達は相談活動に取り組むことが出来ました。チャリティー、募金など協力出来る範囲での協力はどの相談員もしてきたけれども、相談員が率先してお金を集めなければと、トップから言われるのとは違って、「そうは言っても資金がなければ、電灯の一つもつくわけじゃなし大丈夫かしら」と片隅で思いながらも、私はその言葉に安心して乗っかっていました。

24時間の導入についての4月の全体会で、近藤理事長が挨拶する際、どなたかが「短く御挨拶を」とささやき、「そんなことわかっている」とばかり、私の記憶違いかもしれないのですがちょっとムッとされたことがありました。けれども感情的な表情をされたことはほとんど思い浮かばないのです。会議の席でも皆がいろいろ言った後に、様々な意見を聞きつつ、結局しっかり前に進めていて立ち位置を揺るがせないとの印象があります。「純粋に良いことなのだから、相談員の皆さんがいちばんやりやすいように考えて」と、はたから見れば無理と思えることもその率直で揺るがないところにみなも動かされてきたと思います。

24時間導入の最初の日、深夜帯に入る時間に長年の同志でもある研修委員長の白井節夫さんと共にセンターに来ました。その開始を見届けるためでしたが、そこに待機していた私に、ご自身の産婦人科医になるまでの苦闘とそれだからこそ、いのちの電話をやりたいのだということを話され、ただうなずくばかりで、全くお粗末な聴き手でしかありませんでした。ただ、本当に純粋にこの活動を推し進めたいというお気持ちを確かにその時受け取りました。

葬儀のちょうど1カ月後に細谷亮太先生（聖路加国際病院小児総合医療センター長）の講演会がありました。生前から企画されていたこの講演会に同じ医療者として出席されていたら、きっと心に留められたと思う言葉がたくさんありました。その中でも「人の為に何かをするというのはやはり大変なことで、そのことについて何か言われるかもしれないというようなことについては、何と言うか、乗り越えた大人の意識というものがある」と、この大人の意識をまっすぐに持っていたからこそ、今ここ川崎にいのちの電話があるのだと思わされました。

近藤俊朗先生の大きな遺産をこれからも相談員の一人として仲間と共に引き継いでいきたいものです。先生お疲れ様。これまで本当に有難うございました。

「愛の哲学」が活動の源
岡田良子（3期）

25年前、相談員になるための基礎講義を受け、近藤理事長が「性と人生」というテーマで話をされた。「愛の哲学」という言葉は覚えているが、興味深かったとか、心に残ったとかの記憶はない。その時のノートを見てみたら、「いのちの電話では、全人格をかけ、生命エネルギーを相手に伝える聴き手になることを目指す」との言葉があった。こんな大切なことを伝えられていたのに、私は受け止めていなかったと思う。

私は相談員、事務局員、研修担当として、長い間理事長の身近にいて、理事長の活動を支えた熱い思いの源は何だったのだろうかと、その源をたどってみた。基礎講義で語り、文章にも書かれていることだが、医学生の時、実験中の事故で瀕死の火傷を負い、そばにいた方の適切な対応とお父さまの献身的看病があり、回復された。自殺も考えたという理事長が生きる喜びを伝えたいと、この体験がいのちの電話を始めることにつながった。

いのちは与えられたもの、支えられているもの、自分で生きているのではなく生かされている、与えられたものを返していく。どのような立場であろうが、状況にいようが、一人ひとりはかけがえのない存在であること。認められ、愛される存在であること。このような思いが、理事長の活動の原点にある。

本当に生涯現役として、準備期間も入れて30年間の熱い思いと情熱を持ち、先頭に立って走り続けてこられた。どのセンターもが課題としていた24時間受信、社会福祉法人化、リーダーの養成、自社ビルの所有を次々と達成。新築も果たした。日本いのちの電話連盟では、理事として厚労省補助事業の推進委員となり、リーダー、調整役として大きな働きをされた。

寄付集めも大変で、理事長は電信柱にも頭をさげると言われたほどだ。私が最後にお会した2月4日の連盟の厚労省補助事業推進委員会で、「チャリティーコンサートを開いても、チッケトを売りつけるわけにはいかないので、自分が買って知り合いに配った」という話をされた。公の場で苦労話をお聞きしたのは初めてだった。

理事長は信念の人であり、純情でもあり、一途な方でした。目標達成のためには信念を曲げず突き進むので、時には批判を受けたり、誤解されたりすることもあった。私どもは、理事長の掲げる基本理念には深く同意しながらも、運営の具体的場面では、意見が異なることもあり、それを率直に伝えた時、理事長はハラハラされたと思う。それも大きく包み込んで信頼をもって許容していただいた。全国研修会川崎・東京大会、簡易保険セミナー、性教育大会、自殺予防シンポジウム、周年行事などの進め方で、いろいろ行き違いもありましたが、無事に終了してきた。

「人は、どんな人でもかけがえのない存在」と言えるのは、理事長自身が深く愛された体験をされているから。「人は愛されたように愛する」のです。長い間本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りします。